

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

# **ル→→** 第10章 兼業農家制の課題に 向き合う

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会

## 兼業農家制の課題

ある日、空き牛舎有効活用推進協議会のメンバーで、「酪農における新規就農の課題と対応」というオンライン講演会に参加した。大学の先生による講演や、実際に新規就農した人の意見発表など、メンバーにとって興味深い内容ばかりであった。

話を聞いていくなかで、エル氏はある新規就農者の言葉に引っかかった。それは「就農して最初の1年間はまったく休みがなかった」というものだった。



兼業農家生で新規就農した牧場イメージ イラスト:愛知県刈谷市 清水牧場 宮田彩可

「よく聞く話だが、それではだめだと俺は思う。それができるのはほんの一握りの人だけ

だ。忍耐力があり、よほど牛が好きで目的意識が強い人でなければ。そして人脈や良い物件に巡り合う運も必要だ」

エル氏は思わずパソコンの画面に向かって叫んだ。「それだけ では新規就農の広がりは期待できん!」

横にいたヨシ氏はエル氏に言った。

「画面に向かってそんなに大声出さなくても……。全国各地その地域の事情でさまざまな新規就農の方法があっても良いじゃないですか」

「別に今頑張っている人を否定するつもりは毛頭ない。ただ、愛知県みたいに酪農以外の産業が盛んな都市近郊で新規就農を考えていくには、もっと別の方法を考えなくちゃいかんだろう。だいたいこの辺りの一般企業では週休2日が当たり前。そんななかで、ほとんど休みのない酪農が選ばれると思うか?」

エル氏がそう言うと、ヨシ氏が頷いた。

「だからわれわれは兼業農家制を生み出したじゃないですか。 牛舎を所有することのハードルを下げ、家族で畜産業に関わり、

#### 登場人物 -

- エル氏:愛知県半田市の大規模 酪農家(乳肉複合経営)。空き 牛舎有効活用推進協議会誕生 の立役者。「兼業農家」第1号 を生み出す。
- ヒデ氏:愛知県西尾市の大規模 酪農家。最年長者として幅広 い知識と経験から関係者間の 調整を担う。
- ヨシ氏: 空き牛舎有効活用推進 協議会事務局。かじ取り役と して協議会を牽引。
- マル氏: ヨシ氏の相談役として 協議会運営をサポート。
- キヨ氏:協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

休みも取りやすくする。今までになかった視点ですよね」

「そうだ。こんなに良い方法なのに、このアイデアの真意が新規就農希望者まで届いて いない気がするんだ」

エル氏は机を叩かんがごとく手を振り回した。しかしエル氏は決して怒っているわけではなかった。それは、少しでも酪農業界を良くしたいという強い想いの表れだった。そのことを理解しているヨシ氏は、オンライン講座終了後に改めてエル氏と向かい合った。

「われわれは兼業農家制は素晴らしいと自画自賛していますが、問題点もありますよね。 エル氏も実体験として何か課題を感じていませんか」

エル氏はヨシ氏から目を逸らし、少し考え込んだ。そして自分に言い聞かせるように話 し始めた。

「そうだな。一番気をつけないといけないことは、自分の牧場と親農場との仕事の区切りだ。以前兼業農家第1号のT君の牧場でこんなことがあった。ある日T君の農場に業者が来る予定があって、本来は経営者である奥さんが対応するはずだったが、たまたま子どもが熱を出してしまい奥さんの都合も悪くなった。そして親農場である俺の農場で働くT君が仕事を抜けて奥さんの代わりに対応した。でもそのことに対して、ほかの従業員はよく思っていなかったんだ。公私混同しているのではという陰口が飛んだ。まあ実際T君が抜けた間、その仕事は誰かがやらなきゃいけないからな」

「それでどう対応したんですか?」

ヨシ氏が聞くと、エル氏は、

「T君には正直に、同僚からそのように見られるから今後気をつけるよう話しをした。会社として休みを取りやすくすることも大切だがな」と言った。

「親農場と近いがゆえの問題ですね。経営者が急遽不在になったらその用事は変更してもらうとか、割り切りが必要だと思います。1時間かけて通勤している私には急遽駆けつけるのは無理なんでね」

ヨシ氏がそう言うと、エル氏も頷いた。

「そうだな。そこはきっちりしておかないと。変な誤解で会社の調和が乱れたら大問題 だからな。話をして本人も理解してくれた」

エル氏は続けた。

「それとこんなこともあった。T君には俺の農場の場長を任せているんだが、そこのF1子牛が死んだことがあって、前日にその牛のケアなどを対応したのがT君だったんだ。そうしたらほかの従業員が、もし自分の牛だったらもっときちんと対応したんじゃないか?というようなことを、T君に言ってしまったんだ。決して悪気があったわけではないんだが、T君はショックを受けたようで、もう自信がないから農場長を辞めたいと俺に言ってきた」ョシ氏はそれを聞いて驚いた。「そんなことがあったんですか」

「すぐ幹部を集めて話をした。兼業農家制の仕組みや将来展望についてもね。『まだできたばかりのこの制度で、T君は先陣を切って頑張ってくれている。この事業はT君が牧場を持つだけの話ではなく、俺達の会社の未来を見据えた事業になると思ってやっている。皆も応援してやってくれ。問題は出てもいい。いや、逆にいろいろ出たほうが良い。それについては会社として対応していく。良い仕組みになって、君達の中からも第2、第3の農場持ちが出てきてほしい』そんな話をしたら、一応落ち着いたよ。何でもそうだけど、

社内での情報の共有って大事だよな。社長がT君ばかり可愛がっていると思われてもいけないし」

## 雇う側と雇われる側

エル氏が思わぬ苦労をしていることを知ったヨシ氏は、自分の経験も重ねてこう言った。 「情報の共有って簡単じゃないですよね。この空き牛舎有効活用推進協議会だって、本拠

地の愛知県内でもきちんと理解されていません。特定の農家にだけ人材が集まるだけで、愛知県全体に恩恵がないと言われているんです。いろいろな方法で発信はしているつもりですが、皆に十分伝わっていない。大学へ出向いての酪農講座やインターンシップ生受け入れも、みんな愛知県の新規就農を増やすために頑張っているつもりなんですけどね」

少し寂しそうなヨシ氏を見て、エル氏も、

「理解してもらうって難しいな。だけど、インターンシップに 来た学生が愛知県に就農したか? と聞かれると実績がないのも 事実だ。現地を見に来たのに選ばれないんだから、まだわれわ れの努力が足りないとも思うよ。学生が溢れんばかりに来てほ かの農家にも紹介できたりすれば、認められるんだろうけどね。 まだまだそこには至っていない」

と自嘲気味にそう話した。少し後ろ向きになってきたので、 ヨシ氏は、

「今の学生は、福利厚生がしっかりしていて、人間関係などの職場環境が良いところに行きたいと思っていますよね。だから私は、県内の酪農家がわれわれの活動を見て共感してくれて、雇用環境をレベルアップしたり、インターンシップを受け入れたり、そういった協力体制が広がるといいなと思っています」と、先を見据えた話をした。これにはエル氏も、



新農場でみんなで協力して生乳生産する

「そうそう。何も努力をせずに、ほしいという要求だけでは人は来ない。われわれだってこれだけやっていても人が来ないんだからな。人材がほしいとかほしくないとかいう短期的な考えじゃなくて、若い世代を育てるという地道な取り組みと思ってやることが大切だ」と同調した。

「人を育てるって大事なことですよ。エル氏も良い経営者になりましたな」 ヨシ氏はそう言って笑った。

「でも、従業員の立場になると、いろいろ不満があることも耳にします。例えば家族経営の中に1人雇われたりすると、やはり1人だけよそ者でやりにくい。仕事の失敗を従業員のせいにされたこともあるって聞いたことがあります。一方で、雇う農家側の言いぶんもありますよね。私の言いたいのは、『農場』というチームのコミュニケーションをしっかり取ってほしい、ということなんです。福利厚生や仕事内容に至らない部分があっても、コミュニケーションが取れていていれば、折り合いをつけることができるはずです。さらには、兼業農家制の成功にもつながると思います」

ヨシ氏がそう言うとエル氏は、

「ミーテイングのときに、従業員たちには何でも言ってくれよと話してはいるけど、大学での講義で質問が出てこないのと同じで、皆の前では言えなかったりするんだよな。だからときどき飲みに誘ったりして言い出しやすい雰囲気を作ったり、幹部連中に愚痴聞いてやれよと頼んだりしてはいるんだが」そう言って少しだけ目を伏せた。

### 森を目指す

兼業農家制は今のところ、初期投資の少ない肥育や和牛繁殖から始めることを推奨している。酪農じゃないのか、と言われることもあるが、数年後農地取得資格を得て、自分が経営者として自信をつけた後、周辺の農地を買うなどして本来やりたいと思っていた農業、それが酪農なら酪農へと発展していくことを期待している。しかしそれでは、曖昧さを否めないのも事実だ。

そんな釈然としない気持ちを心の片隅に持っていたヨシ氏であったが、オンライン講座 に参加してみて、兼業農家制に対する新たな見方を持った。

「親農場にぶら下がる兼業農家が増えることは、言い換えれば農場全体の規模が拡大すると言うことですよね。当然そのぶん作業も増える。だから、搾乳作業や繁殖管理なんかの休みの取りにくい業務は皆でやれば、交代で休みは取れますよね。勉強のための研修参加も組織として行なえば効率的。これは結果的に、兼業農家制=親農場の生乳生産量を増やしていくことにつながります」

一息おいて、ヨシ氏は続けた。

「兼業農家制で取得した農場は、それぞれの経営主がそれぞれの特色を活かして経営展開すればいい。ホルスタインの育成部門をやったり、分娩させた乳牛を親農場にレンタルしたり、柔軟な在り方が模索できます」

ヨシ氏のそんな考えに、エル氏は少し驚いて言った。

「なるほど。休みの取りにくい酪農の課題をクリアしながら、減少傾向にある生乳生産量をどうやって増やすのか? ということに対する解決策にもなる。今出たのか、その発想は」

「酪農組合の職員ですからね。農家が1戸離農しました。そこで新規就農者を1戸増や します。それで農家戸数は維持できるけど、経営者自身の休みや福利厚生を向上させてい くことにつながりにくい。これでは家業の繰り返しであって、産業へとは発展しない。兼 業農家制では、搾乳じゃない業態から入ることを勧めてるわけで、そこからどう生乳生産 に結び付くのか、ということは常に考えていた部分でした。今回のオンライン講座もヒン トになりました。いろいろなことが、今結びついたんですよ」

ただし、とヨシ氏は続けた。

「一方でわれわれは、家族経営も守らなくてはいけない。大規模農場、家族経営、新規 就農者、兼業農家制……。そういったものすべてが地域の酪農の発展に必要なわけで、だ からこそ組織が責任をもってフォローしていかなくちゃだめだと思うんですよ」

ヨシ氏がそう言うと、エル氏も話を継いだ。

「そうだな。畜産はどっちみち1人でやっていくことは難しい。機械メーカーやメンテナンスをやってくれる業者、飼料会社、獣医師などがすぐ来てくれることも大切だ。そのためにはその地域の農家が少ないと、メーカーも遠くから来ることになりコストも高くつく。集乳してくれる指定団体だって集約していたほうが効率は良いはずだ」

「そうです、そうです。だから、森を目指していかないと!」

突然ヨシ氏の口から出た『森』という言葉にエル氏が首を傾げたのを見て、ヨシ氏は続けた。

「森と林の違いって知ってます? 林は人の手が入った人工的なもので、樹の高さなど画一的な場合が多い。森は太陽をいっぱいに受けたい高木から、日陰が好きな苔類まで、いろいろな要素が絡み合って形成されているんです。私は、兼業農家制によって酪農業界にそういう『森』が生まれることを夢見ているんですよ。もちろん、実現させる夢という意味で!」

兼業農家制は、先行き不透明な社会のなかで、畜産業を仕事として選んでもらうための 仕組みを創造しようと考えた結果生まれてきた。食に関わる仕事という安心感。老後の収 入確保。サラリーマンでは所有することが難しい広い土地で将来の事業展開を夢見る。さ らには、そういった個人的なメリットだけではなく、ほど良い田舎暮らしという生活様式 の変革、畜産・農業の多様性の創出、地球規模の食料危機への対応など、オーバーかもし れないが、社会貢献に発展する可能性も秘めている。ヨシ氏は、兼業農家制が生み出す『森』 が、深く豊かなものになってほしいと、改めて思った。魚

《つづく》

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

# ☆ 第11章 兼業農家制は続く

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会

## 現在の姿

ョシ氏は思った。エル氏やヒデ氏達とともに活動を始めて5年。はたしてその成果はあったのか? そこでヨシ氏は、エル氏やヒデ氏、普及員など、関係者から聞き取りを行ない、ここ5年程度の動き、現在の姿などを整理してみた。



イラスト:愛知県刈谷市 清水牧場 宮田彩可

## 【エル氏の場合】

エル氏は自身の規模拡大に合わせて、将来酪農を始めたい若者を受け入れる環境整備の ため、精力的に動いてきた。

#### 1) 空き牛舎の取得

これまでに3カ所の空き牛舎を取得して、従業員を農場長として農場の管理を任せている。老朽化が進んでいる部分を修繕し、トイレや休憩スペースなども整備した。

#### 2) 新牛舎建設

本農場の隣地を購入し、畜産クラスター事業を活用して新たな牛舎を建設した。全部で5棟、F1肥育牛750頭を増頭した。

### 3) 土地の取得

さらなる事業展開のため、半田市や近隣市の土地を4カ所取得した。面積は延べ4.7haほどで、ふん尿処理施設やカウコンフォートに配慮した牛舎の建設などを検討している。

#### 【ヒデ氏の場合】

ヒデ氏は地域オンリーワンを目指して、独自の取り組みを拡大し てきた。

### 1) エコフィード

3年前、エコフィードの製造機械を導入して自農場での生産を開始した。自農場で使うほか、一部はほかの酪農家にも供給している。

#### 2) 自給飼料

かねてより実践している稲WCSの利用量は着実に増えてきており、現在では年間330tとなっている。栽培、収穫は稲作農家に委託

### - 登場人物 -

エル氏:愛知県半田市の大規模 酪農家(乳肉複合経営)。空き 牛舎有効活用推進協議会誕生 の立役者。「兼業農家」第1号 を生み出す。

ヒデ氏:愛知県西尾市の大規模 酪農家。最年長者として幅広 い知識と経験から関係者間の 調整を担う。

ヨシ氏: 空き牛舎有効活用推進 協議会事務局。かじ取り役と して協議会を牽引。

マル氏:ヨシ氏の相談役として 協議会運営をサポート。

キヨ氏:協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

するだけでなく、自農場でも行なっている。また稲を栽培している水田には堆肥を還元して、資源循環にも貢献している。新たな取り組みとしては、飼料米の利用を開始し、その量は年間70tとなっている。

#### 3) 空き牛舎の取得

西尾市内の1軒の空き牛舎を取得した。今のところ、堆肥処理施設を利用するとともに、 空いた施設をエコフィード置き場として使っている。

### 4) ジャージー牛の導入

自らが経営する乳加工品の製造会社「酪」で、ジェラートなどの原料として使用するため、 ジャージー牛を3頭導入し搾乳を始めた。乳量こそ少ないが、暑さに強く、繁殖も良いと いう思わぬメリットも享受できた。

#### 【T牧場の場合】

兼業農家第1号として経営を開始して3年が経過した。

#### 1) 飼養頭数

F1 肥育牛8頭と乳用牛の預託からスタートした経営は、現在では最大52頭の肥育牛を管理している。2カ月ごとに4頭を定期的に出荷して、経営安定を図っている。

#### 2) 親農場との関係性

飼料や堆肥処理について、就農時は親農場の力を借りていたが、今ではほぼ独力で対応できるようになった。飼料については、当初は親農場と同じ場所に納入してもらい、必要なタイミングで取りに行くようにしていたが、現在では自農場に飼料タンクと飼料庫を整備した。また堆肥についても、親農場の堆肥置き場を借りていたが、自分で堆肥舎を整備した。経営開始当初に親農場を頼れたことは、新規就農の諸々の不安を考えればその意義は大きかった。

一方で、作業労力については親農場と持ちつ持たれつの関係を続けている。今は3カ月に1回程度、親農場に依頼して自農場の作業を手伝ってもらっている。それにより休みを取得することができている。

## 3) 今後の目標

農場の敷地内には使用していない倉庫などの建物がまだ残っている。牛を飼えるスペースはきれいにして増頭し、不要なものは解体整理して、将来に向けて有効活用していきたい。また、コストを削減すべきところなど経営のノウハウが少しずつわかってきたので、より安定した牧場経営ができるよう努力していきたい。和牛繁殖や乳用牛の預託受け入れの再開などの経営展開も考えている。

T牧場は経営を開始してわずか1年で、枝肉共励会の優秀賞を受賞した。これにはヨシ氏を始め、空き牛舎協議会の関係者は皆喜んだ。そして今回紹介した3名以外にも、愛知県の酪農を盛り上げようとする酪農家、関係者はまだまだいる。ヨシ氏は、そういった事実を改めて噛みしめて、これらの取り組みを必ず次につなげていこうと思った。

## 兼業農家制は続く

ヨシ氏は登山を趣味にしている。これまで登山の途中で、過去から現在まで、脈々と生



命をつないできた大きな樹に出会うたびに、いつも思っていた。一つの生命体として遺伝子を後世につないでいくために、 幾多の環境の変化に対応して生き抜いてきたからこそ、何百年、何千年経った今、 その姿がここにあるのだと。

人には脳があり、そこから各部門に命令がいく。だから脳が損傷を受けると身体全体が機能しなくなる。また手や足を切ってもそこから新たな生命は生まれない。でも樹はそうではない。どこかの部分が損傷を受けても生き延びることができる。接ぎ木なる技もある。つまり組織体が長命を保とうとすると、一極集中では成り立たないのだ。それぞれの部門が独自で意思決定できる力を有することが必要だ。

また、植物は自ら動くことはできないが、その代わり他者に種子を運んでもらう術を持っている。虫だったり鳥だったり、風だったり。そのために「運び屋」を呼び寄せる魅力を備えるなどの工夫をして生命をつなぎ、また生育範囲を広げていく。あるいは何十年に一度しか咲かない花だってある。常に右肩上がりの成長じゃなくても、耐え忍ぶための機能も備えているのだ。

ヨシ氏は、そのことを兼業農家制に当てはめてみた。兼業農家制は1戸の農家だけを対象にしているわけではない。親農場の牛の頭数だけでなく、子農場の成長も合わせて、酪農や畜産を地域全体で考えている。そして関係者は皆、お互いに助け合って成り立っている。一極集中ではないのだ。

さらに言えば、この制度は、さまざまな樹々が重なり合いながら成長する森を生み出すと考えることもできるのではないか。林と森の違いを考えればわかりやすいだろう。林は人の手が入った人工的なもので、樹の高さなど画一的な場合が多い。でも森は太陽をいっぱいに受けたい高木から、日陰が好きな苔類まで、いろいろな要素が絡み合って形成されている。

実際、愛知県で広がりつつある「森」には、こんな例も生まれている。1年ほど前、エル氏の牧場などへ1週間ほどインターンシップにきた女子学生が、今年度4月に愛知県酪農協の新規採用職員となった。愛知県は彼女の地元であり、県の職員になること自体は彼女の進路の一つであったのだが、驚くのは、その最初の配属先がエル氏のいる地域を管轄する普及課という巡り合わせだ。偶然といえば偶然であるが、少なくとも空き牛舎有効活用推進協議会のこれまでの活動が、人と人とを結びつけ、「森」を豊かにし、地域を魅力あるものにすることにつながっていると言えるのではないだろうか。

協議会発足5年後の今、親農場であるエル氏のもとには、空き牛舎や農地を買ってほしいという話が複数舞い込んできている。エル氏はそのたびに売主にこう言うそうだ。「私は兼業農家制というものを推進しています。このシステムは農家を増やして地域を活性化させることができます。今回ご提供いただいた物件は、今は私が買わせていただきますが、それはやがて新しい農家を生むことにつながります」と。

親農場は第2、第3の新規就農者を育てるべく、着々とその活躍の舞台を用意している。

### 酪農を愛する皆様へ

さて、この「兼業農家のススメ」も今回を入れてあと3回。いよいよフィナーレを迎え

ようとしています。これを読んでいただいている方々の多くは、多かれ少なかれ酪農に関係する仕事をされているかと思います。あるいは酪農に関心を持っている若い方もおられるかもしれません。本章の最後に、そういった方々にエールを送る意味で、エル氏とヒデ氏とヨシ氏、そして空き牛舎有効活用推進協議会に関係する行政の人達の声をお届けします。生の声なので、その熱い思いを感じてください。

- 〇「酪農に携わって40年。コロナ禍の中、最高売り上げ、最高収益となった。それは社員の血と汗の賜物。努力の結果がある。こんな頼もしい仲間と仕事ができることの楽しさったらない! 全国の学生の皆さん。そういう仲間と酪農をやろう。組織は人だ。土地や牛は増やそうと思えば増やせる。しかし人は違う。今後も良き人材に選んでもらえるような牧場作りを心がけてやっていきたいと思います」(エル氏)
- ○「全国第8位の酪農県である愛知県には、多様多種な酪農場があります。『牛と触れ合いたい』『いろいろな牧場を知りたい』『牛の仕事をしながら、生活もエンジョイしたい』『将来は牧場を持ちたい』、いろいろな思いを持った若者達。ぜひ愛知県に来てみてください。みんなで楽しくフォローします!」(ヒデ氏)
- ○「コロナ禍で、観光業界・飲食業界・芸能業界・スポーツ業界など多くの業界は大打撃を受けている。予測できない未来。どんな職業がいいのか? 学生のインターンシップを担当している私には就活に差し掛かる学生の不安の声が聞こえてきます。農学部関係で学ぶ皆さん。今こそ農業でしょ! 大儲けができるかはわからないけれど、生活することには困らない。そんな生活基盤を持ち、そのうえで

自分の趣味を活かした人生を送る。そんな新しい生活スタイルを自分で創っていくことを提案します。ぜひ、就活の候補として酪農業を考えてみてください」(ヨシ氏)

○「畜産業をはじめとする第1次産業は大規模化が進んでいます。こうしたなか、兼業農家制による新規就農は一見、時代の潮流に逆行している取り組みと受け取られることもあります。しかしながら、皆さんが『自分の牧



場で好きなように牛を飼う』という夢を抱くのであれば、それを実現 させる取り組みとして理にかなっているものと確信しています。逆風も向きを変えれば 追い風となります! 皆さんが新しい視点を取り入れながら、酪農業を担う一人となっ ていただけることを期待します」(行政)

○「先日、脱公務員をし、牧場の第三者継承をされたという女性の記事を拝見しました。 そこでは、妊娠・出産といった女性ならではのライフイベントについてどのように対応 するのか、そこだけは見据えて就農することを推奨されていました。これを読み、私は 愛知県独自の兼業農家制の素晴らしさに気づかされました! 女性目線でも旦那さんが 牧場で安定して働きながら就農をすることができる、またそれを推奨している柔軟な発 想を持った支援者がいる愛知県は(もちろん男性にとっても)とても魅力的だと思いま す。情報環境が発達している昨今では、牧場暮らしに憧れること、一度はあるのではな いでしょうか? そんなとき、愛知県での牧場暮らしを思い浮かべていただき、ぜひ一度、 現場を見に来てください。未来ある皆さんが愛知県の酪農を支えていただける存在とし てご活躍されることを期待しています」(行政)

- ○「酪農に興味を持っている皆さん。ぜひ、愛知県に足を運び、牧場の仕事をご覧ください。 皆さんの1歩が牧場の発展につながります!」(普及員)
- ○「牛好きのあなた! 牛好きであれば、酪農を仕事にすることをぜひ考えてみてください。 世の中で好きなことを仕事にできている人は、ほんの一部の人だけだと思いますし、好きなことがあるということ自体がまずもって素晴らしいと思います。ただ、好きなだけでは仕事にできないという意見もありますよね。そこで皆さん、まずは愛知県に来てみてください。愛知県は交通網が発達していますので、県外からのアクセスは抜群ですし、県内の移動も便利です。農場の近隣に市街地がありますので、日々の暮らしに不便を感じませんし、休日もエンジョイできること間違いなしです。便利な田舎で酪農をやりながら、充実した人生を送ってほしいです」(県獣医師)

\*

ヨシ氏「県の職員の人達も良いこと言ってくれますねえ。彼らはまだ若い。愛知県の酪農の将来はきっと明るいですね。エル氏とヒデ氏と私は60代。でも、まだまだこれからです。これからも思うがままに、欲望のままに動きましょう。欲望が我欲であれば人は離れます。でもそれが世のため人のための欲望であれば人はおのずと集まります。豊かな森を作っていきましょう」

エル氏「もちろん自分は頑張れるとこまでやりますよ。でも、ある程度のところまでいったらその先は若い連中に任せる。任せたら細かいところに口出しをするつもりはない。それでもそういった同志と、わくわくする夢の話題で飲むような楽しいことは、いつまでもやっていきたいね~」

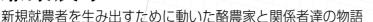
ヒデ氏「愛知県酪農農業協同組合は、空き牛舎有効活用推進協議会が農家を増やすため にいろいろな、ときには突拍子もない活動をしていることを認めてくれているわけでしょ。 それってとてもありがたいし貴重なことだよね」

ヨシ氏「酪農関係者、乳業関係者に酪農の将来に対して今何をすべきか? と聞きますと、 今ある農家を支援し継続してもらうこと、というある意味現実的な答えをする人が多いん です!

エル氏「それはそれでとっても大事なことだ。でもそれでは農家が減ることはあっても増えることはない。事実、今は毎年のように農家戸数は減少している。だから俺達は本流から外れて、ヒデ氏が言う突拍子もない活動を始めたんだよな」

ヨシ氏「そうです。組織の中にいると、何か新たなことをやって失敗すると非難されることが多い。だから、何もせず言い訳していたほうが良いとなってしまうんです。行動を起こす時点では、それが正解かどうかなんてわからないですよね。空き牛舎有効活用推進協議会の活動に関わって改めて実感したのは、正解がわからなくても考え続けること。そして最初から頭の中だけで否定せず、実際に行動してみてその結果から次の対応を考えること。そういったことが本当に大切であるということです。それを実践しているエル氏とヒデ氏は素晴らしい」

エル氏とヒデ氏「頑張っているのはわれわれだけじゃないよ。成否にかかわらず、組織として新たなチャレンジを続けていけば、必ず未来は開かれる。皆さんも応援してください! L & 《つづく》



## 

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会

## 序文

「兼業農家のススメ」は、酪農家エル氏と空き牛舎有効活用推進協議会の事務局ヨシ氏を中心として描かれてきました。エル氏とヨシ氏は酪農家と団体職員という関係で、時間の長さだけを見れば30年ほどの付き合いになり

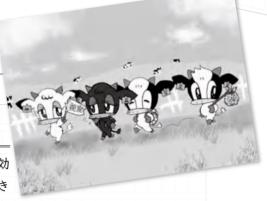


イラスト: 愛知県刈谷市 清水牧場 宮田彩可

ますが、お互いを本当の意味で理解し始めたのは、実は最近のことです。それぞれの環境の変化のなかで、さまざまな縁が絡み合って今に至っているのです。それはエル氏とヨシ氏だけでなく、ヒデ氏やほかの関係者達も同様です。

愛知県には多くの酪農家、酪農に携わる方々がいて、それぞれの考えのなかで、さまざまな経営や取り組みを展開してきました。「兼業農家のススメ」は、そのなかから最近の動きの一つを物語にしたに過ぎません。それでも、もし皆様に何かを感じ取っていただけるのであれば幸いです。

そして物語は最終章を迎えました。まずはこれまでお読みいただき、ありがとうございました。しかし、ここですべてが止まるわけではありません。われわれはこれからも歩み続けます。今後もご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

## 旅立ちのとき

#### 「立派な牛舎ですね~」

完成して間もないエル氏の半田市の新牛舎を前にして、ヒデ氏は 感嘆の声をあげた。県内では珍しいフラッシュシステムを導入した 牛舎は、同業者であるヒデ氏の目にも新鮮に映った。

ヒデ氏とエル氏はこれまで会合などで顔を合わせることはあっても、こうして直接話をするのはほとんど初めてであった。ヒデ氏の牧場がある西尾地域を管轄する普及員であるキヨ氏が、エル氏とも面識があったため、その仲介でエル氏の牧場を訪問したのだった。

「パーラーも使いやすそうだ。肥育牛もこんなにたくさんいて、搾 乳と肥育とでここまでの規模にもってくるのはさすがですね」

#### 

- エル氏:愛知県半田市の大規模 酪農家 (乳肉複合経営)。空き 牛舎有効活用推進協議会誕生 の立役者。「兼業農家」第1号 を生み出す。
- ヒデ氏:愛知県西尾市の大規模 酪農家。最年長者として幅広 い知識と経験から関係者間の 調整を担う。
- ヨシ氏:空き牛舎有効活用推進 協議会事務局。かじ取り役と して協議会を牽引。
- マル氏:ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。
- キヨ氏:協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。



ヒデ氏がエル氏に言うと、エル氏は、

「乾乳の管理をもっときちんとしなくちゃいかんけど、なかなか場所がないし、そのほかにも課題はまだたくさんあります」

そう言いながら、

「いずれにせよ、現状で満足はしていない。頭数

もまだまだ増やしていきたいですわし

と熱く語った。その声は、近い将来自分の想いを必ず実現させる、という強い響きを帯びていた。しかし、牛に対する想いはヒデ氏も負けていない。2人は、その後も時間を忘れていろいろな意見交換をした。

その日の夕方、帰りの車中でヒデ氏はキヨ氏に言った。

「エル氏はエネルギッシュだね。ひょっとすると彼の牧場は愛知県でナンバーワンになるかもしれない。僕にはあそこまでの規模拡大は真似できないなあ。でも前から言っているように僕は、水田での自給飼料生産だとか、地域の未利用資源の飼料化だとか、6次産業化だとか、酪農教育ファームだとか、乳牛の共進会だとか、そういった多様化のなかで地域オンリーワンになりたいとは思っているよ。難しいけどね」

暮れなずむ空の下、ハンドルを握るヒデ氏の目は、進む道路の先をしっかりと見つめて いた。

\*

今から20年ほど前、平成13年の秋のことだった。

ヨシ氏は、半田市を中心とした近隣市町の酪農家で構成される地域酪農組合の職員だった。ヨシ氏の担当地域は半田市であった。市町村単位で見れば、半田市は全国有数の酪農地帯で酪農家も牛も多く、また組合活動も活発であったため、ヨシ氏の毎日は多忙を極めた。

「先週末に、組合事務所の近くのコンビニエンスストアから、夕方に家畜の糞の匂いがきつかったという苦情が市にあったそうです。コンビニの場所から推測すると、関係しているかもしれない牛舎は4軒ありますね。誰か心当たりはありますか?」

ョシ氏は組合の会合で問いかけた。人口10万人を超える半田市では、臭気問題は避けて通ることができない案件だった。

「みんな堆肥の切り返しの時間帯は、気をつけるようにしているつもりだが。 風向きとか、 いろいろ事情が重なってしまったかもしれないな」

組合員の1人がそう発言した。ヨシ氏は、

「作業の時間帯もそうだし、そのほかにも組合で脱臭資材の試験をやったり、堆肥の研修会を開催したりと、皆さんが環境対策に気を遣っていることは重々承知しています。ただ、一般の人の目は厳しいですし、これからもやれることはきちんとやっていきましょう」そんなある日、ヨシ氏は県域の愛知県酪農農業協同組合の副組合長である半田市の酪農家に誘われ、2人で酒を飲んでいた。その場で副組合長はヨシ氏に、今は半田市中心で頑張ってくれているが、愛知県全体の酪農のために仕事をしてみないかと声をかけた。

県の組合に来いという突然の誘いにヨシ氏は驚き、すぐには何も言えなかった。

「これからも半田市は、愛知県の酪農をけん引していく地域の一つであるだろう。ただ、

全体的な酪農家戸数の減少は否めない。そうなってくると、やはりオール愛知で頑張らないと、産業としての酪農が衰退していってしまうと思わないか」

その言葉に、ヨシ氏は頷くほかなかった。半田市でも毎年のように離農していく組合員がおり、その話を聞くたびにヨシ氏は寂しい思いをするとともに、将来に対する漠然とした不安を感じていた。

「おっしゃることはよくわかります。ただなんて言えばいいのか……」 そう口ごもるヨシ氏に副組合長は、

「急に言われても困るわな。まあ少し考えておいてくれ」

と、ヨシ氏の肩をポンポンとたたいた。

その後もしばらく2人で雑談を続けていたが、副組合長はふと思い出したように言った。 「そういえば、エル氏が静岡県に第2牧場を建設するそうだな」

その話はヨシ氏も耳にしていたが、具体的な内容はよく知らない。第2牧場のことについて、エル氏本人の口から聞いたことはなかった。ヨシ氏はエル氏が組合の会合の場で、組合活動の方向性など、自分の考えを積極的に発言している姿をいつも見ていたが、2人でじっくり話をしたことはなかった。

「規模拡大を模索していくなかで、県内で土地をいろいろ探していたが、うまく話がまとまらなかったようだ。やはり都市化が進むなかでの規模拡大は難しいということかもしれないな。彼も迷ったようだが、愛知県からそう遠くない隣県で良い場所があったから決めたそうだ。経営のやり方は人それぞれだから何も言うことはない。ただ、愛知県全体の乳量を確保していく方法も、これからは考えなくてはいけないんじゃないかと思っているんだ」

その後ヨシ氏は、家族や関係者に相談をしながら、最終的に愛知県酪農農業協同組合で働くことを決めた。平成17年春、それはエル氏の第2牧場が稼働して半年後のことだった。

\*

ヒデ氏は6次産業化に向けて、同じ西尾市の若手酪農家と連携して準備を進めていた。 加工・販売の場所、加工技術の習得、商品の種類、法人立ち上げの方法など、考えなくて はいけないことは山ほどある。愛知県内でもすでに6次産業化に取り組んでいる先駆的な 酪農家はいる。後発であるがゆえに、勉強するための材料が揃っているとはいえ、ヒデ氏 にとっては難しいことばかりであった。

「申し訳ないけど例の件、頼みます」

ヒデ氏は、自分よりひとまわり以上若い酪農家の行動力を頼りにし、結果的にそれが大きな原動力となった。

それまでもヒデ氏は、地域の酪農家や関係者との連携を意識してきた。

「当面の目標は稲作付け前の水田で、堆肥散布面積100ha。いけそうですか」

西尾市酪農組合の会合で、ヒデ氏は組合長として役員達に問いかけた。すでに何度か検討されてきた内容であり、役員からはそれぞれ普段付き合いのある稲作農家との話し合いの結果が報告された。

「皆さんありがとう。来年度に目標達成できそうですね。われわれ酪農家が組織的に散布 作業を請け負うことで、皆さんには負担がかかると思いますが、地域の酪農振興のためよ ろしくお願いします。キヨ氏も行政からの支援をお願いします」 酪農家で堆肥散布組織を立ち上げたのは、遅々として進まない耕畜連携の実現に向けて、まずは酪農家が結集することが必要であるとの思いがあったからであった。そしてその思いは稲作農家や農協、行政を巻き込んで、地域を盛り上げていく取り組みにつながっていった。

6次産業化でもヒデ氏は地域貢献を目指した。規模拡大や生乳生産の効率だけを考えれば、西尾市のような都市近郊でなくても、ほかに酪農をやるための条件の良い場所はあるだろう。でも、街の近くに牧場があるからこそできることもある。新鮮な牛乳のおいしさ、生乳を作ることの難しさと素晴らしさ、牛の優しさ、そして命の大切さ。そういったことを、乳製品をとおして消費者に直接伝えていこうとヒデ氏は考えた。

また、抹茶を使用したアイスクリームやプリンなどの商品も開発した。西尾市は全国一の抹茶生産量を誇る。農園には堆肥を使ってもらい、そこから生産される抹茶と生乳のコラボは、地域内資源循環の体現だった。

そんな合同会社「酪」が立ち上がったのは、平成19年夏の終わりのことだった。

\*

エル氏にとって平成20年代は、牧場経営に大きな変化をもたらす10年となった。

その10年の間に、半田市の隣接市にある空き牛舎を二つ買い取った。さらには半田市の本場の隣の土地に、新牛舎を建設する計画に着手した。

「お前ら、牧場の管理は任せる。好きなようにやってくれ。何かあったとき、責任は俺が取る」

エル氏は従業員達を新しい牛舎の農場長にして、経営感覚を身につけてもらうことで、 さらなる牧場発展につなげようと考えていた。

さらに、半田市のほかの酪農家2名と共同経営する焼肉店「黒牛の里」の経営展開を図り、 ハンバーグなどの洋食を提供する新店舗の営業を開始した。

しかし、「黒牛の里」の事業拡大とほぼ同時期に起こったのが、静岡の第2牧場の牛舎の 倒壊だった。平成26年2月の豪雪によるものだった。

「正直、牧場を再建する気力が湧いてこない」

エル氏は第2牧場の従業員を前にして、初めて弱音を吐いた。そこまで落ち込んだエル 氏の姿を目にするのは、従業員達にとって初めてだった。

「何人かはしばらく半田の牧場で働いてもらうことはできるが、みんなに不安定な生活をさせるわけにはいかない。すまないが次の仕事を探してくれ」

エル氏は頭を下げ、そう言った。しかし従業員達の口から出たのは、エル氏にとって思いもよらない言葉だった。

「私はこの牧場で、社長や皆と一緒にまた仕事がしたいです」

「牛舎を建て直す間、自分は別の所で働きますが、完成したら必ず戻ってきます。ぜひ 再建してください」

「社長、一緒に頑張りましょう」

エル氏の目からは、ひとりでに涙が湧くように溢れ出た。

その後しばらくして、エル氏はヨシ氏に相談があると声をかけた。

「エル氏から相談とは珍しい。何ですか?」

ヨシ氏はいぶかしげにエル氏と向かい合った。

「俺は親父のやっていた酪農経営に入って、これまで30年間しゃにむに規模拡大を目指してきた。でも最近になって考えが変わってきたんだ。俺は従業員や飼料会社や獣医師など関係する人、そして社会のために会社を大きくしたい。そして若い人を愛知県に呼び込んで、産業として酪農を発展させていきたい。そのために力を貸してほしいんだ」

ヨシ氏は正直驚いた。これまで知っているエル氏の口から、そのような言葉が出てくるとは思ってもみなかったのだ。エル牧場ファーストのはずだったエル氏が……。

それでも自分の考えとエル氏の思いが重なったことがヨシ氏は嬉しく、これから何かが 動き始めることを敏感に感じ取った。

「わかりました。地域を巻き込むとなると大きな話になりますね。ほかの人の力もいります。例えばヒデ氏とか。ともかくまずは、もっと詳しいことを聞かせてください」

それは、平成26年も暮れようとしている冬のことだった。

\*

「キョ氏、久しぶりですねえ。何年ぶりかな。マル氏は初めましてですな。どうぞよろしく」 エル氏は中部国際空港の出発ロビーで、2人にそう挨拶した。

「キョ氏とマル氏は、エル氏の越後屋のような腹黒いたくらみを手助けしてもらうため に、私が声をかけました」

ヨシ氏が言うと、

「誰が越後屋ですか。越後屋じゃなくて越後のちりめん問屋のインキョ。これからはそう言ってくださいよ」

と、エル氏は大きな声で笑った。

「あ、ヒデ氏も来ましたよ。これで5人揃いましたね」

ヨシ氏はチェックインを済ますと、保安検査場から搭乗ゲートのほうへと皆を誘導した。 大きく開放的なガラス窓の全面に、雲一つない青空が広がっていた。ヨシ氏が窓に近づ くと、5人が搭乗する飛行機の周囲で、何人かの作業員が動き回っているのが見えた。す るとその向こうの滑走路を、今まさに離陸せんとするジェット機が走り抜けていった。ヨ シ氏はそれを目で追ったが、その場所からは長い滑走路の先は見えず、機体はあっという 間に大空高く舞い上がっていた。

ヨシ氏は皆のところに戻ると、声高らかに言った。

「いよいよ空き牛舎有効活用推進協議会の活動がスタートします。これから何が起きるか予想できませんが、愛知県の酪農のために、皆さん頑張りましょう!」

平成27年6月、こうして5人は、北海道

浜中町へと飛び立った。♪

《つづく》





新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

# エピローグ」みんなで歌おう

### 愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会

ヨシ氏は常に能動的に考え動いてきた。最初は、愛知県のような都市近郊酪農のなかでいかに新規就農者を作るか? というところから出発した。そして兼業農家制というスタイルに辿りついた。その後は、その兼業農家をどう増やしていくのか? という課題にぶつかる。現段階での答えはこうだ。

エル氏のような農家が出てくること。これは、単に新規就農者が増えるというだけでなく、親農場にもたくさんのメリットが生まれるということ。兼業農家を増やしていくためには、自農場発展のための一つの方策として兼業農家制に取り組む、こういう動機こそがポイントになる。

大げさかもしれないが、30~50年後の世界的食糧不足への対応、持続可能な経済成長のための方策、家族や地域社会での幸せのあり方などを考えていくなかで、"農業に関わり未来を拓く"ために兼業農家制が貢献できないか、とも思う。

山本兼一著の『利休にたずねよ』の中に、 ヨシ氏のお気に入りの一説がある。利休の 言葉である。

「人は誰も毒をもっておりましょう。毒あればこそ生きる力も涌いてくるのではありますまいか。肝要なのは毒をいかに志までに高めるかではありますまいか。高さをめざして貪り、凡庸であることに怒り、愚かなまでに励めばいかがでございましょう」



イラスト: 愛知県刈谷市 清水牧場 宮田彩可

### 兼業農家制のススメ

1

サラリーマンには 絶対できない 牧場の持ち方教えます 大型農家の 戦略として 従業員にススメているのです 1 本の大樹より 接ぎ木が育って行けば やがては森になり 魅力ある産地へと生まれ変わる 旦那は牧場の従業員です 給料も休みも安泰です 奥さん名義で空き牛舎買って 新規就農をするのです

(2)

兼業農家のメリットとしては 最初の投資を抑えます 牧場持っても 給料あるから 一気に収益を上げなくてもい いのです

農という職業は 食う事には困らない 年金がなくなっても 仕事が好きなら一生楽しめる 親農場の堆肥センターと 飼料工場を利用して 人脈・補助金に感謝しながら 古い牛舎を再生するのです

(3

数年地道に農業やると 農地取得資格がもらえます 経営ノウハウ学んで来たので 規模拡大も狙えます 農という職業は 食と大地守るもの 人々の生活の 安全保障を担っているのです 1 本の大樹より 接ぎ木が育って行けば やがては森になり 魅力ある産地へと生まれ変わる

自分の牧場持ちたいならば こんな方法もございます 夢ではなくて現実的です あなたの未来を拓きます 牛が好きならぜひ来て下さい 牧場の持ち方教えます 夢ではなくて現実的です あなたの未来を拓きます

### 一緒に牧場やりません?

僕の夢は自然の中で 牛と共に暮らす事 食を守り 土地を守り 仲間と語る事 君の夢を聞かせてよ 素敵な夢だろう 君も牛が好きならば 一緒に牛舎を持とう 君の夢と僕の夢を 二人で育てて行こう 僕は夢を夢のままで 終わらせないから

僕が牛を好きなのは 牛乳を牛み出すから 他の命を奪わずに 命をつないで行ける どんな牧場を作ろうか とてもワクワクするね 知識やお金を蓄えて 地道に進んで行こう 君の夢と僕の夢を 二人で背負って行こう 君の夢も夢のままで 終わらせないから

君も牛が好きならば 一緒に牛舎を持とう 君の夢と僕の夢を 二人で育てて行こう

ヨシ氏は思う。これこそエル氏にもってこ いの言葉だと。60歳代になったわれわれは、 少なくなってきた人生だからこそ、これから も思うがままに、欲望のままに暴れたいと。 そしてエル氏もきっとこう言うだろう。

「もちろん自分は頑張れるとこまでやりま すよ。生きている限り牛を増やす! そして、 畜産業界に入って来た若者が夢を掴み、幸 せで充実した人生が送れるよう応援してい く。俺の欲は、いつまでも若い連中とわ くわくするような夢の話題で飲み明かすことだな」

## エルファームよもやま話

(1)

あるとき社長が言いました なんでうちの店なのに うちの牛が出て来ない そんなばかな話はない 肉には等級がありまして 同じおいしさ保つため 4クラス以上と決めたから 我が家の牛でも仕入れない それならそれなら 肉牛部門はがんばりたまえ いい牛育てて評価上げ 自分の店に並べたい

生産者が 一番うれしいのは 自分が育てたものを おいしいと言われたとき 『がんばります』『知多牛をよろしく』 食でつながる コミュニケーション りっぱな知多牛育てます 安心安全 お届けします 活気があふれる牧場です 愛知のエルファームへぜひどうぞ

あるときお客が聞きました F1 交雑種って何ですか? 母親乳牛 父親和牛 それが知多牛ひびきです 肉の等級は絶対評価 どんな産地の銘柄牛も 肉質等級がめやすです だから育て方が大事です それなら知多牛は 地元で育てて地元で食べる 新鮮さではトップを走り 地元愛でもNO. 1

生産者が 一番うれしいのは 自分が育てたものを おいしいと言われたとき 『がんばります』『また来てくださいね』 味でつながる コミュニケーション りっぱな知多牛育てます おいしいメニューでお届けします 笑顔があふれるお店です 黒牛の里へぜひどうぞ

## **♣▶→** 登場人物 ——

エル氏:愛知県半田市の大規模 酪農家 (乳肉複合経営)。空き 牛舎有効活用推進協議会誕生 の立役者。「兼業農家」第1号 を生み出す。

ヒデ氏:愛知県西尾市の大規模 酪農家。最年長者として幅広 い知識と経験から関係者間の 調整を担う。

ヨシ氏:空き牛舎有効活用推進 協議会事務局。かじ取り役と して協議会を牽引。

マル氏: ヨシ氏の相談役として 協議会運営をサポート。

キヨ氏:協議会の立ち上げに助 力。その後は協議会活動を陰 に陽に記録。

「兼業農家のススメ」の物語は第12章で終わりま した。しかし、その第12章の序文でこう書きました。 「でも、ここですべてが止まるわけではありません。 われわれはこれからも歩み続けます」

こうしている今も、空き牛舎有効活用推進協議会 はその活動を続けています。今回は「兼業農家のス スメ」の付録として、ヨシ氏作詞作曲の歌をご紹介 させていただきます。ヨシ氏のシンガーソングライ ター (?) としての活動の原点は、本連載12月号に 掲載の「第4章ジャックに捧げるバラッド」をご一 読ください。もし、歌っているヨシ氏の姿を見たい という殊勝な方がお見えになられましたら、次ペー ジのQRコードを検索してみてください。

#### 牛が好きだから 人が好きだから

1

牛が好きだから この景色が好きだから 辛い時もあるけど 牛とともに生きる 不器用な性格で 他に取りえもなく 己の道を信じて 牛とともに生きる

そんな仲間を 皆に知って欲しくて 日本全国 取材して回る お~DJ! 牛が好きだから 人が好きだから 苦楽を共にして 牛とともに生きる

(2)

牛が好きだから この道で生きて行きたい 与えられた定めだと こだわって生きる 自分の好きな牛 皆にも知って欲しいよ 牛を愛して生きる 人を愛して生きる

そんな仲間を 皆に知って欲しくて 日本全国 取材して回る お~DJ! 牛が好きだから 人が好きだから 苦楽を共にして 牛とともに生きる

そんな仲間を 皆に知って欲しくて 日本全国 取材して周る お~DJ! 牛が好きだから 人が好きだから 苦楽を共にして 牛とともに生きる

生とともに生きる



## 牛好きnet愛知YouTubeで検索

一緒に牧場やりません?

## 酪農やるなら愛知に来いや!

名古屋だぎゃ 豊田だぎゃ でえりゃあうみゃあは味噌煮込み 空港近きゃあし コンビニ近きゃあし 便利な田舎で牛飼っています~ (セリフ)「では、お手を拝借。私が掛け声をかけたら、

酪農やるなら 愛知に来いや インターンシップは 愛知に来いや 就職するなら 愛知に来いや よ〜おっ、パン

『愛知に行きます。』 『愛知に行きます。』 『愛知に行きます。』

猛暑だぎゃ 苦情だぎゃ 大変なだけ進化する 生活便利で 余暇も充実 都会の近くで 牛飼っています〜

(セリフ)「では、お手を拝借。私が掛け声をかけたら、 『愛知(牧場)に行きます。』と叫んで下さい。」

動物好きなら 愛知に(牧場)来いや 動物好きなら 愛知に(牧場)来いや 動物好きなら 愛知に(牧場)来いや よ〜おっ.パン

『愛知に行きます。』 『愛知に行きます。』 『愛知に行きます。』

「皆様。長らくわれわれの物語にお付き合いいただきありがとうござい ました。もちろんこれからもわれわれはいろいろな欲望を持つでしょう。その中の一つで も二つでも志まで高められるよう、面白おかしく励んでまいります」

(空き牛舎有効活用推進協議会一同)



酪農業界に明るい風が吹きますことを願って。 2021年吉日

《了》